

アダム・ミツキェヴィチ大学 日本学専攻について 1994年度現状報告

佐々木 巧

1. 機関概要

所属： 新文献学部 東洋学・バルト学科 日本学専攻科

設立： 1987年

制度： 5年制修士課程 隔年募集(今年度は2・4学年のみ)

代表者：アルフレッド・F・マイエヴィチ(教授)

今年度日本語担当：ポーランド人 3名 日本人 5名

異動：

就職 佐々木 巧(94年10月)

休職 アンナ・コメンジンスカ(文部省研究生・大阪教育大学)

ロベルト・カシャ(国際交流基金日本語教育研修参加)

学生数：1995年5月現在

学年	男子	女子	計	現時点学年末試験合格者
2年	5	5	10	9名
4年	4	6	10	9名

(4年生1名、国際交流基金司書研修参加のため、前期休学)

2. カリキュラム： 当機関発行『1994年度日本学専攻案内』参照

3. 授業報告(1994年10月-1995年5月)

隔年で新生を募集しているため、本年度は2・4学年の授業が開講された。

3.1 日本語の教材

2学年 日本語演習：

『総合日本語 初級から中級へ』(凡人社)

『総合日本語 中級』(凡人社)

『日本語作文1』(専門教育出版)

その他教師作成による問題集・プリント

表記： 『日本語の書き方』(久山・UAMボズナニ)

翻訳論入門： 『アメリカ人の日本神話』(三島由紀夫・著)

日本語記述文法： "The Grammatical Category of Aspect in Japanese and Polish in a Comparative Perspective" (A.Majewicz)

"Contrastive Analysis of Japanese and Polish Phonemic & Phonetic System" (A.Majewicz) 他

日本文学文化史： "Literature Japonska" (M.Melanowicz)

4 学年 日本語演習：

聴解用	『ニュースで学ぶ日本語』『インタビューで学ぶ日本語』(凡人社)
会話用	『ロールプレイで学ぶ日本語』(凡人社) その他学生による語彙ノート
作文用	『日本語作文Ⅱ』(専門教育出版)
読解用	『中級からの日本語 読解中心』(新典社) 『日本のすべて(英文対訳)』(三省堂) その他教師選択のテキスト・プリント
表記：	『日本語の書き方』(久山・UAMボズナニ)
翻訳演習：	『ムーンライト・シャドー』(吉本ばなな・著)
古典文法：	教師選択のテキスト(枕草子・徒然草・源氏物語・土佐日記 他)
卒論ゼミ：	様々な分野からの自主選択資料

3.2 特に日本語演習(プラクト)における反省点と課題

2 学年：『総合日本語 初級から中級へ』は比較的易しかったようである。むしろ、『総合日本語中級』を前期で使い、後期にはより高いレベルの教材を使用したほうが良かったかもしれない。とはいえ、中級教材としてはこれが会話の自然さや語彙の豊富さなどでは最適との判断から1年間、ポーランド人が主に文法・読解、日本人が会話の運用力及び作文を担当して十分な成果が得られたと思う。ただ、助詞などの初級文法事項が疎かになってきた学生やあるいはこの1年間で学生間にかなりレベルの差がでてきた点は今後の課題である。

翻訳入門で用いられたテキストは初級としては少し難解だったようだが、学生にとってとても興味深かったようである。

4 学年：会話用として用いたテキストは少し簡単すぎたが、今まで学習していない決まり文句等の練習には役立った。また、聴解用で用いたテキストも学生には好評だったようである。特に後期で学生自ら関心分野の語彙をピックアップし、それに関する表現も含め、発表し、次回には小テスト(これも学生自身が作成)を実施するというパターンで授業が進められたが、これは学生の授業態度を前向きにさせた。

前期の読解用として用いたテキストは、内容的に易しくしかも漢字に読み仮名が付されているせいか、予習してくる学生を激減させ、かえって読解能力を低下させたようである。そのため後期で生の教材(筒井康隆・太宰治・横光利一などの小説)を扱った際、能力の差が顕著に現れてしまった。

翻訳演習は日本語というよりはむしろ学生の母国語の能力の優劣が問われたようである。

3.3 修士論文のテーマ

4 学年：〔言語学〕	日本語の条件文構造、手紙の中で使われている敬語、ワープロ、日本語のオノマトペ、慣用句
〔文学・美術〕	現代日本における『小説の小説』、現代日本文学、歌麿の美人画
〔社会問題〕	在日朝鮮人に対する差別問題

4. 学生について

4.1 日本語を専攻した動機

- ・高校時代に日本の武道(空手、合気道など)に興味もった。
- ・宗教、特に禅宗に関心があった。
- ・ポーランドで紹介された日本のテレビ番組を見て、日本に興味をもった。
- ・日本文化(特に沖縄の言語や風習など)に興味をもった。
- ・どうせ5年間研究するのなら、一番難しい言語を学習したいと思った。

4.2 学生の活動

1) 日本への留学状況

- 1995年度 文部省日本語・日本文化研修留学 [1年間]
在ワルシャワ大使館からの推薦 2名(4年生)
その他、民間の日本語教育機関への日本留学 1名(4年生)
- 1995年度 文部省研究生 2名(卒業生)
- 1995年度 国際交流基金日本研究講師等フェローシップ 1名(卒業生)

2) 1994年度日本語弁論大会優秀者

- 1位 カロリーナ・フジョンステク(2年生)
- 5位 マチエイ・カネルト(2年生)

4.3 学生の生活

住宅：学生の約半数は自宅外通学者で、バス・電車(トラム)等を利用し、大学から15-30分の範囲の学生寮・下宿等に住んでいる。寮費は\$40。下宿費・家賃は\$25-125。

奨学金：学生の半数以上が奨学金を得ている。家庭の収入と本人の学業成績により、\$25-45程度支給されている。

アルバイト：日本語の通訳、英語の家庭教師、翻訳、スキーのインストラクター等。

4.4 現在までの本学科卒業生数

- 1992年 -- 8名
- 1994年 -- 6名(予定)

5. 今後の予定と課題

- ・日本政府文化無償によるLL教室導入(1995年9月着工)。
- ・優れた少数の研究者の養成。
- ・ポーランド人の日本語教師の育成と専門分野の拡張。
- ・教材の不足と、学生が教科書を個人所有できない現状。
- ・日本語図書の整理と、学生が自由に閲覧できる場所の確保。
- ・十分な教室の確保(現在、教官室もない)。
- ・黒板・ホワイトボードなどの環境整備。
- ・表記(漢字)の授業を1-2学年に集中する試みが行われても良いのではないか。
- ・日本語に限らず、他分野の専門知識やあるいはアジア諸国を研究する機会。